

中晩生ももの果肉褐変症の発生要因

中晩生ももの果肉褐変症果（通称：煮え果）は、大玉、低硬度の果実ほど発生が多い傾向が認められた。

農業研究センター果樹研究所落葉果樹部（担当者：東 光明）

研究のねらい

近年、中晩生ももを中心に成熟期に果肉が褐変化する症状が多発し、経営上大きな問題となっている。このような障害果は全国の産地で発生しており、発生要因の解明及び対策技術の確立が急がれている。

このため、果重及び果実硬度との関係を解明し、要因分析の資料とする。

研究の成果

- 1 果肉褐変症の程度を、褐変化した面積に応じて5段階で評価する。（「微」については外観からの障害果の判断が難しく、「軽」についても難しいものが多く含まれている。「中」以上についてはすべて外観から判断可能である。）
- 2 果肉褐変症果が多く発生する樹では、果実が大きいほど障害程度の重い果実の割合が多くなる。「川中島白桃」においては、400gを越えると障害果が多くなり、特に450gより重い果実では「軽」以上の割合が6割程度になる。
- 3 同じく、果実硬度が低くなるほど障害程度の重い果実の割合が多くなる。「川中島白桃」においては、硬度が1.75kg以下になると障害果が多くなる。

普及上の留意点

- 1 過度の大果生産をねらわず、品種に応じた大きさ（長沢白鳳250～300g、川中島白桃300～350g）の果実生産に努める。
- 2 硬度は、針頭が円錐形 12mmの果実硬度計による測定値で、1.75～2.50kgを目安に収穫する。

表1 ももにおける果肉褐変症の障害程度

障害程度	褐変した最大面積 ^{a)}
無	0cm ²
微	1cm ² 未満
軽	1cm ² 以上で2cm ² 未満
中	2cm ² 以上で、赤道部切断面の1/3未満
甚	赤道部切断面の1/3以上



a) 切断面が最大になるところを測定した

写真1 果肉褐変症の障害程度

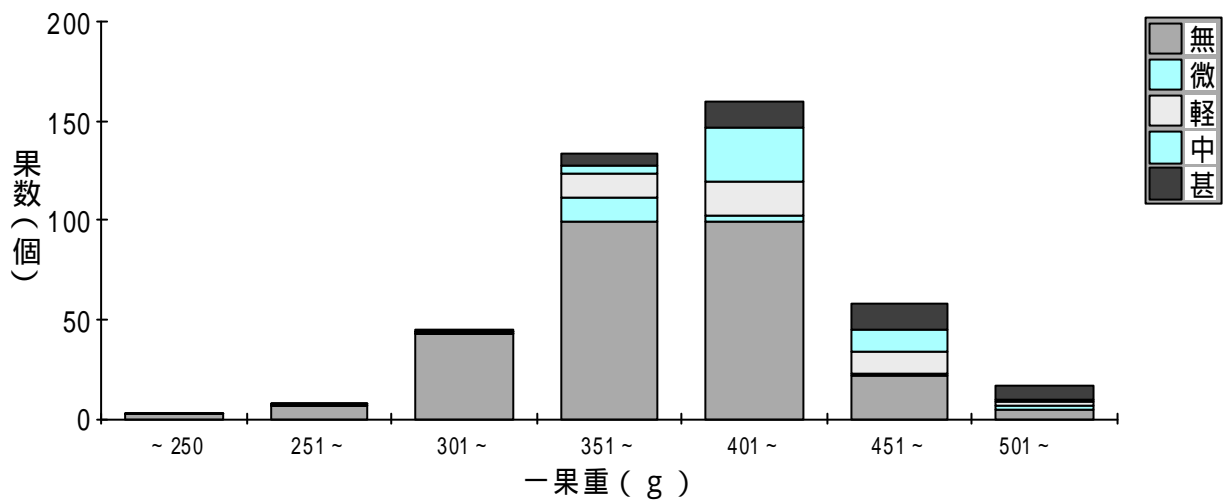


図1 「川中島白桃」果実の重量と果肉褐変症の障害程度別割合

注) 平成11年、13年生1樹に着果した果実425個をすべて調査した。

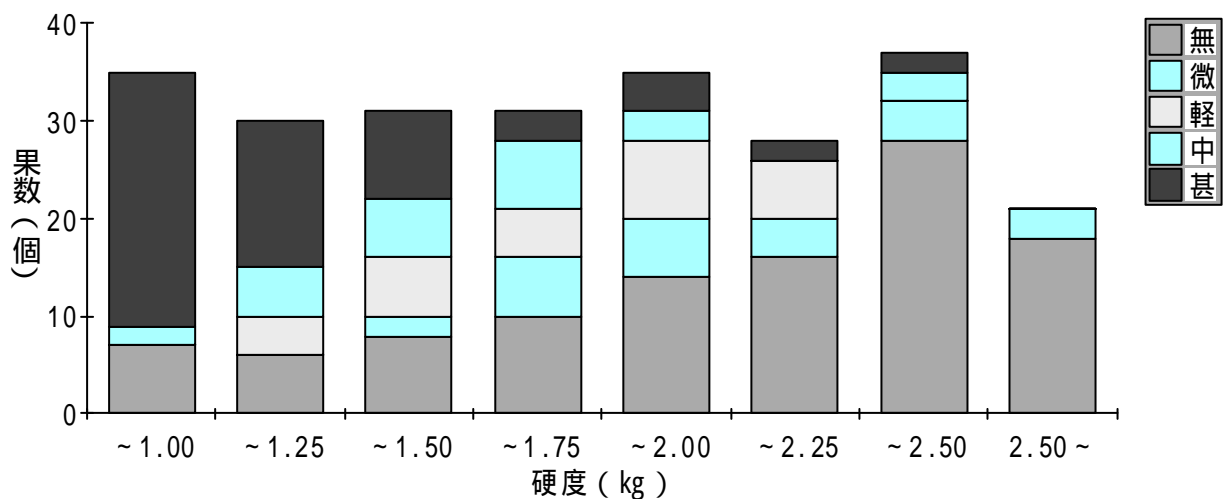


図2 「川中島白桃」果実の糖度と果肉褐変症の障害程度別割合

注) 平成12年、14年生樹。硬度計の針頭は円錐形 12mm。